

健康づくり・スポーツ推進特別委員会行政視察概要

1 視察月日 令和6年11月25日（月）～11月26日（火）

2 視察先及び視察事項

（1）愛知県豊明市

豊明市における健康づくりの取組について

（2）愛知県豊田市

「ずっと元気！プロジェクト」の取組について

3 視察委員

委員 市 来 栄美子

委員 竹 内 康 洋

視察概要

1 視察先

愛知県豊明市

2 視察月日

11月25日（月）

3 対応者

長寿課課長補佐兼地域ケア推進担当係長（挨拶）

長寿課地域ケア推進係職員（説明者）

4 視察内容

（1）豊明市における健康づくりの取組について

ア けやきいきいきプロジェクトの取組

けやきいきいきプロジェクトは産官学民連携の地域包括ケアシステムの取組である。取組は、65歳以上の人口が25%を超え、特に後期高齢者の増加、独居高齢者や高齢者のみ世帯が顕著な大都市近郊の高齢化モデルの典型である、豊明団地を舞台としたものである。

急激に増える医療・介護ニーズに対し医療・介護分野での深刻な担い手不足の状況下で、在院日数の長期化や、入退院の繰り返しなどにより全国・県平均を上回る一人当たりの医療費が問題視されている。そのような中、軽度者を要介護状態にしないための仕組みづくりが求められている。

プロジェクトの概要として、豊明団地をモデル地区とし、UR都市機構と学校法人藤田学園との連携により、健康促進への仕組みを構築している。UR都市機構は、高齢者にとって住みづらいエレベーターのない集合住宅の高層階を学生向け家具つき住居として廉価で提供し、その代わりとして団地や地域のボランティア活動などに参加し、地域活性化へ貢献することの義務を課している。

イ ふじたまちかど保健室の取組

ふじたまちかど保健室は、街の保険室として地域住民が気軽に立ち寄れる工夫がなされており、年中無休でオープンしている。藤田保健衛生大学の先生や訪問看護師、薬剤師が協力して運営し、専門的な知識と技術を生かしたサービスが提供される点が特徴である。

健康に関する悩みや疑問を気軽に相談できる看護師・薬剤師相談

や認知症、生活習慣病、熱中症予防に関する健康教室、自宅での健康管理に関するアドバイスを行う訪問看護や地域住民が集まり、交流を深める場を提供している。また、藤田保健衛生大学の学生による体操指導、専門家による様々な講義やプログラムを展開している。

ウ 質疑概要

Q 豊明団地全体の居住者のうち藤田保健衛生大学の学生は、どの程度なのか。

A 団地の居住率は99%埋まっており、学生の居住率の割合は全体の1～2%ほどである。

Q 藤田保健衛生大学は、医学部、医療科学部、看護学科など様々な学部があるが、学生は学部に関係なく、プロジェクトに参加できるのか。

A 学部に関係なく、全ての学生がプロジェクトに参加可能である。月3万2千円で家族型の広い家具付きの部屋に住むことができる。

Q コロナ禍や近年の課題はあるか。

A 全体的に学生が少なくなっていることである。例えば、小学校も2校が統廃合されて1校になった。大学生も相対的に少なくなっており、代わりに企業で働く外国人家族が空き部屋に入居するようになり、近隣住民とのトラブルのケースもある。

Q 産官学民の連携事業で他にも成功している事例があれば教えてほしい。

A 豊明市のスーパー銭湯は、来客数が少なく経営が落ち込んでいた。一方で、豊明団地の高齢者からは、団地の浴槽をまたぐのが大変という話を聞いていた。スーパー銭湯へのバスが団地内を通ることから、デイサービスよりもおいしく、しっかりとした食事がとれ、お買い物も楽しめ、安全に入浴できるスーパー銭湯の特徴をアピールし、高齢者の自発的な外出を促すプログラムを促進する案が出た。地域の運動会などを通じ、スーパー銭湯の利用を周知する機会をつくった結果、公費をかけることなく高齢者の健康向上につなげることができ、スーパー銭湯にとってもよい結果となった。

Q ふじたまちかど保健室は、健康維持、健康づくりのためにも毎日オープンすることで高齢者へ安心感を与えていると思うが、コロナ禍においてはどのような運営をしていたのか。

A 住民の安全・安心のため、「開け続けることが大切」であると

いう信念のもと、消毒液やマスクを着用するなどの工夫をし、とにかく継続してオープンした。保健室の中に入れなくても、外からの挨拶や声かけが当時のコミュニケーション持続と精神的な支えになったと感じている。

(2) 委員所見

高齢化率が25%を超え、後期高齢者人口の増加が著しい中で、長期的な居住者を求めているUR都市機構や、高齢者の入院期間の短期化及び退院後の受皿を探していた藤田医科大学病院が豊明市との産官学民の連携により、協力し合った素晴らしい取組であると思った。

また、まちなか保健室のアイデアは、本市の高齢化が進んでいる団地などにも応用できると感じた。



(まちかど保健室前にて)



(まちかど保健室の外観)

視察概要

1 視察先

愛知県豊田市

2 視察月日

11月26日（火）

3 対応者

議会局総務課職員（挨拶）

企画政策部未来都市推進課主査（説明者）

4 視察内容

（1）ずっと元気！プロジェクトの取組について

ア ずっと元気！プロジェクトの取組

ずっと元気！プロジェクトは豊田市が令和3年7月に開始した、合同会社 Next Rise ソーシャルインパクト推進機構とともに、ソーシャル・インパクト・ボンド（SIB）を活用した官民連携による介護予防事業である。

市域の7割を森林が占め、人口約41万5000人、2025年には75歳以上の後期高齢者人口が2010年比の2倍以上と、急速な高齢者数の増加が見込まれる豊田市において、誰一人取り残さない包括的な支援体制を構築する必要性があり、幸福寿命を全うするため、健康寿命を延ばすことを目的とした事業である。

事業費としては、5年間で最大5億円を投じ、年間5000人の参加者を獲得し、介護給付費を10億円削減することを目標としている。事業開始から2年の時点で、参加者の将来における介護給付費削減効果は約3億7000万円と推計されている。

今後の課題としては、介護給付費削減効果を一層高めるため、新規参加者の獲得と現在の参加者が継続的にプログラムに参加するよう促す取組が必要である。

プログラム参加者の割合が低い地域においては、本事業の体験イベントの実施や自宅訪問、高齢者クラブや自治会等への講師派遣といった出張型プログラムの拡充やプログラムを提供する民間事業者と連携した本事業のPRも推進している。

イ SIB（ソーシャル・インパクト・ボンド）の取組

ソーシャル・インパクト・ボンドとは、民間の活力を社会的課題の解決に活用し、事業を実施するための資金を民間から集め、事業の成果に応じた成果報酬を市が後から支払う仕組みである。ニューヨーク市などでは、民間事業者の活動の社会的インパクト（行政コスト削減等）を数値化し、自治体等がその成果に応じた報酬を支払うというSIB導入が図られ、民間資金の活用が進んでいる。

ずっと元気プロジェクトは、SIBを活用した官民連携の取組として、社会参加やコミュニケーションをキーワードに、多様な介護予防プログラムを市内の高齢者に向けて、様々な場所で展開している。

ウ 質疑概要

Q プログラムの具体例として、運動や趣味、習い事などは思いつくが、その他に人気のあるプログラムや特徴的なものがあれば教えてほしい。

A コロナ禍の外出自粛で体力が低下した高齢者の健康づくり、フレイル予防のための運動教室などの他に、男性に特に人気があるのは、「一般社団法人ドローンチーム N a d e s h i k o」のドローン操縦教室である。ドローン操縦教室が社会参加を促し、認知症予防に役立っている。また高齢者の孤食を解消したいとしてデザインされた、ボランティア団体のスタッフがテイクアウトした弁当を高齢者宅に届け、一緒に食事もするじーばーイーツプログラムなども特徴的で人気がある。

Q プロジェクトの実績として、初年度の参加者は目標の約半分の2600人であったのに対し、2年目は倍以上、3年目には9100人の参加と、初年度から4倍の参加者だが、参加者数が加速した要因をどう考えているのか。

A 初年度の反省から、周知の方法を多角的にした。高齢者が医療機関を訪れた際、医師から行政が企画するイベントを宣伝してもらった。またプロジェクト自体を議員が地元で紹介をしてくれたことで加速的に周知が進んだ。

(2) 委員所見

豊田市においても、2025年には高齢化率が25%を超える状況にあり、急速に高齢者数が増加している。ずっと元気でいられるためのプロジェクトを生み出していく仕組みづくりが素晴らしく、SIBを用いた展開は本市でも取り入れることが可能ではないかと思った。

また、運動だけにとどまらない意外性のあるプログラムを展開していることも魅力的であった。仕組みづくりとして大切なこととして、行政が考えたものを実施するのではなく、「仕組み、機会、イベント会場」を提供し、プログラムの人気度によって、助成金を獲得する度合いが高まる仕組みが競争や改善を生み出し、事業者の挑戦を後押ししており、様々なプログラムが成功している原因ではないかと感じた。



(会議室にて説明聴取)